

【特別寄稿】

パクパと五台山との関係

嘉木揚 凱 朝

はじめに

パクパ (HPhags pa blo gros rgyal mtshan、八思巴・洛追堅贊、1235–1280)⁽¹⁾は、五台山⁽²⁾に参拝した最初のチベット仏教の僧侶であった。本稿では、パクパの五台山参拝が、チベット仏教、モンゴル仏教、中国仏教それぞれにもたらした多大な影響について考察する。

モンゴル帝国政権下で国師になったのは、パクパが初めてではない。すでにモンゴル帝国憲宗モンケ・ハーン (Mongke Han 蒙哥汗 1252–1259在位) のとき、中国仏教の海曇法師とカシミール国の那摩法師がいる。しかし、チベット仏教僧侶で国師になったのは、パクパをもって嚆矢とする。モンゴル帝国は、チンギス・ハーンの時代からさまざまな宗教の共存を認め、包摂してきた。「兼容並包」という、内容が異なり性質の相反するものでも合わせて受け入れる方針で、諸宗教はモンゴル帝国のために福德を祈願してきた。中国では、重要な影響をもつ仏教と道教とを平等に扱ってきた。しかし最終的にはチベット仏教を選択した。パクパの行動と影響が大きかったからである。

フビライ・ハーンは、パクパ創出のモンゴル文字をモンゴル帝国の「一代制度」とし、元朝公文書に正式使用を命じた。パクパの「文字」は、元朝の国威発揚の基となった。その創出の必要性は『元史』の「釈老伝」⁽³⁾と『元史記事本末・明史記事本末』⁽⁴⁾により確かめられる。この点をふまえつつ、本稿でパクパと五台山との関係について研究する。

一、パクパの五台山への思い

パクパは、23歳の時 (1257年5月7日)、フビライ・ハーンの援助を受けて、中国仏教の四大名山の一つである文殊菩薩の道場の五台山 (Ri bo rtse lGa) に巡礼した⁽⁵⁾。パクパは7月7日、五台山で『文殊菩薩名号贊』を、次いで五台山の各山峯を巡礼する間に『文殊菩薩堅固法輪』を著わし、さらに『贊頌文殊菩薩』花朶之鬘を著わした。

パクパは、『贊頌文殊菩薩』花朶之鬘の巻頭の語として、

【原文】

依忽必烈大王福德之力、講經僧八思巴前來五台山向文殊菩薩祈願時、釈迦牟尼顯示多種神變、因而增益贊頌之心願、為使解脫之法幢矗立並護佑衆生之故、蔭火蛇年七月八日於五台山、写成此『贊頌文殊菩薩』花朵之鬘⁽⁶⁾

【和訳】

フビライ・ハーン帝王の福德の力のお陰により、仏の教えを伝え広げる 僧のパクパが五台山に来て文殊菩薩に祈祷している時、釈尊が種々の神通力を顕わされた。だから私はあたたかな心で賛頌したいと思う。解脫の法幢を聳え立て衆生を護佑するために、チベット暦の蔭火蛇年7月8日に、五台山において、この『贊頌文殊菩薩』花朵之鬘を著わした。

と記している。

二、パクパによる五台山文殊菩薩贊頌

またパクパは、『在五台山贊頌文殊菩薩』珍宝之鬘という詩を作っている。

【原文】

如須彌山王的五台山、基座象黄金大地牢固、五峯突兀精心巧安排、中台如雄獅發怒逞威、山崖象白蓮一般潔白、台如同象王的頂髻、草木象蒼穹一樣深邃、南台如同駿馬臥原野、金色花朵放射出異彩、西台如孔雀翩翩起舞、向大地閃耀月蓮之光、北台如大鵬展開双翼、滿布綠玉一般的大樹⁽⁷⁾

【和訳】

須彌山の王のような五台山、基座は黄金で大地を固めたように堅牢である。五つの峯は高く聳え、念入りに巧みに配置されている。中台は雄獅子が怒りを発し威勢を表わしたようであり、山や谷の景色は、白蓮と同じように潔白である。東台は、象の王の頂髻のようであり、草や木は蒼穹と同じように深遠である。南台は、駿馬が原野に臥しているようで、金色の花びらがいろいろな色を照らし出している。西台は、孔雀が美しく踊っているようで、大地に向かって月蓮の光りを照り耀やかしている。北台は、大鵬が両のつばさを開けたようで、緑玉のような大樹が遍満している。

と記述している。

昔から中国の多くの文人や詩人は、五台山に旅して、五台山の自然と風景を賞で、それぞれ詩を著わした。

中でも有名なのは、宋朝詩人の張商英の著わした『遊五台山詩』である。そこで五台については次のように、

【原文】

宝台高峻近穹蒼、獅子遺踪八水旁、五色雲中遊上界、九重天外看西方、三時雨洒龍宮冷、一夜風飄月桂香、土石尚能消罪障、何勞菩薩放神光⁽⁸⁾、

【和訳】

五台は高く険しく、大空につながっており、獅子が足跡を八水の傍に遺す。五色の雲の中を天上に遊び、九つに重なった天から西方を見る。三時に注ぐ雨で龍宮は涼しく、一晚中月桂の香りの風が吹く。土も、石も、罪障を消すことができるので、菩薩が神光を放つまでもない。

とうたっている。

金代の有名な詩人の元好問が著わした『台山雜咏』16首がある。彼は1255年、五台山に遊んだといわれる。

彼の著わした詩には次のようにある。

【原文】

山雲吐吞翠微中、淡緑深青一万重、此景只応天上有、豈知身在妙高峰、咄嗟檀施満金田、遠客遊台動数千、大地嗷嗷困炎暑、山中多少地行仙、沈沈龍穴貯雲煙、白草千花雨露偏、佛土休将人境比、誰家隨歩得金蓮⁽⁹⁾、

【和訳】

山の雲は薄い緑色の中に雲と霧を吐いている。淡い緑色、深い青色が幾重にも重なっている。このような景色は、ただ天上にあるだけと思われるが、思いがけなくも、ここ妙人高峰に在る。ああ信者の施は金池華に満ち、遠く台山に遊ぶ参拝者はややもすれば数千名、大地ではすざましい暑さに悩んでいるが、山中には多くの仙人の修行地がある。龍穴にはどこも雲煙がたなびき、白草や無数の花に雨や露がしたたっている。佛土と人の住む世界とを比較することなかれ。どの家を尋ねても行く先々に黄金の蓮の花に出会う。

このように、モンゴル帝国元朝に、文人として詩人として有名な張商英と元好問の二人は、五台山の風光の明媚さや空気の清浄さなど、自然の美しさを詠じ尽くしている。

それに対して、仏教の高僧としてのバクパの見方と考え方は、特徴があると思われる。

五台山で、文殊菩薩が神通力を顕わして説法する。その説法によって、諸仏がそれぞれの

浄土から人間界、すなわち五台山に来る。そして、諸仏が法を伝えるというのが、チベット仏教における密教の原点である。

三、パクパによる五台山の「五台」と五部仏との関係

パクパの考え方によれば、五台山の五台が密教における金剛界の五部仏の仏座であるとされている。チベット仏教の密教の説によれば、五部仏の中の大日如来（MahAvairocana 大毘盧遮那）は獅子座に坐し、阿闍仏（ASobhya 不動仏）は象座に坐し、宝生仏（Ratn 溪ara）は馬座に坐し、阿弥陀仏（AmitAyus 無量壽・AmitAbha 無量光）は孔雀座に坐し、不空成就仏（Amoghasiddhi）は大鵬座に坐している。

それをパクパは、獅子座を中台とし、象座を東台とし、馬座を南台とし、孔雀座を西台とし、大鵬座を北台として、以下のように賛頌している⁽¹⁰⁾。

【原文】

為救護愚癡所苦之衆生、大圓鏡智之主大日如来、
在中台示現仏部部主身、向尊救護色蘊之尊頂礼

【和訳】

愚かな迷いの中に苦しむ衆生を救済するために、大圓鏡智を具える大日如来仏は、中台で仏部の部主の姿を現わして、あなたの色蘊の苦を救護し給う仏尊に礼拝したてまつる。

【原文】

為救護嗔恚所苦之衆生、法界体性智之主阿闍仏、
在東台示現金剛部主身、向尊救護識蘊之尊頂礼

【和訳】

怒りで苦しむ衆生を救済するために、法界の体性智を具える阿闍仏は、東台で金剛部の部主の姿を現わして、あなたの識蘊の苦を救護し給う仏尊に礼拝したてまつる。

【原文】

為救護慳吝所縛之衆生、平等性智之主尊宝生仏、
在南台示現宝生部主身、向尊救護受蘊之尊頂礼

【和訳】

吝嗇に縛られる衆生を救済するために、平等性智を具える宝生仏は、南台で宝生部の部主の姿を現わして、あなたの受蘊の苦を救護し給う仏尊に礼拝したてまつる。

【原文】

為救護貪欲所苦之衆生、妙觀察智主阿弥陀仏、

在西台示現蓮花部主身、向尊救護想蘊之尊頂礼

【和訳】

貪欲に苦む衆生を救済するために、妙観察智を具える阿弥陀仏は、西台で蓮花部の部主の姿を現わして、あなたの想蘊の苦しみを救護し給う仏尊に礼拝したてまつる。

【原文】

為救護嫉妬所苦之衆生、成所作智不空成就仏
在北台示現羯磨部主身、向尊救護行蘊之尊頂礼⁽¹¹⁾

【和訳】

嫉妬に苦む衆生を救済するために、成所作智を具える不空成就仏は、北台で所作作業（kamma 羯磨）部の部主の姿を現わして、あなたの想蘊の苦を救護し給う仏尊に礼拝したてまつる。

四、パクパと五台山寺院との関係

パクパの五台山に関する作品は、中国の学者達の中ではあまり知られてない。しかし、それらは、パクパが五台山を参拝した因縁とあいまって、チベット仏教とモンゴル仏教に、与えた影響は甚だ大きい。元・明・清の三朝以来、チベット仏教の僧侶とモンゴル仏教の僧侶、及び一般の人々も、五台山を参拝の聖地として、強く信仰してきた。多くのチベット僧やモンゴル僧が、五台山に修行している。パクパの推薦とフビライ・ハーンの命を受けて、チベットの高僧タンバ師（bsTan pa 胆巴）は五台山の壽寧寺を住持した。パクパの弟子、元朝第四代の帝師イエセリンチェン（YeCes rin chen 意希仁欽 1249-1295）は、五台山で亡くなったという⁽¹²⁾。元・明・清の三朝の皇帝はみな、五台山に寺院を建てた。パクパの尽力で五台山は、チベット人、モンゴル人、中国人（漢族）、満州族の間における宗教と文化交流の重要な懸け橋の役割をになったといえる。その点でもパクパは看過し得ない重要な人物である。

五台山でモンゴル人が管掌する寺院としては、五台山中央の靈鷲峰の頂にあるモンゴル仏教寺院「菩薩頂」がある。菩薩頂は、北魏の孝文帝（471-499）の時代の創建と伝えられ、麓から108段の急峻な石段を登ったところにある。朱塗りの壁と瑠璃瓦の屋根が美しい文殊殿は、大文殊院ともいわれるが、その軒からは、一年中水が滴るので滴水殿とも呼ばれる。唐太宗貞観五年（631年）中国僧法雲が再建し、真容院と呼ばれた。菩薩頂の盛んな時期は清朝であり、清朝の順治十三年（1656年）に、モンゴル僧の寺院に帰した。菩薩頂は、五台山におけるモンゴル仏教の最大の寺院であり、最高位の僧を扎薩克喇嘛（欽命管理五台山事務掌印扎薩克大喇嘛）、扎薩克（Zasag）と呼ぶが、これはモンゴル語で執政の意味である⁽¹³⁾。

五台山にある著名なモンゴル仏教寺院としての羅候寺は、唐代に創建し、明朝弘治五年（1492年）に再建された寺院である。殿内には、大きな円盤の上に蓮花を乗せ、仕掛けによって花卉が開いて内部の阿弥陀仏が現われる「開花現仏」という、四尊の阿弥陀仏像が祀られている。台の上に水浪図案があり、その上に十八羅漢がいる。花卉が開くに従って、羅漢が海を渡っている情景が現われる⁽¹⁴⁾。

因みに十方堂はまた広仁寺ともいう⁽¹⁵⁾。羅候寺の東下に位置する。羅候寺に所属する寺院である。清朝の道光年間（1821～1850）に建てられ、清朝の康熙年代（1662～1722）にモンゴルとチベット仏教寺院になった。永住の僧侶は、モンゴル地域、チベット地域のラサ、青海省、甘粛省出身者が中心である。中国人の僧侶もいる。現在でも五台山の仏典を保存する重要な機関であり、チベット語『大蔵経』を初め、仏教の經典4,569種類が現存されている⁽¹⁶⁾。

五台山は、中国仏教四大名山の中で創建が最も古いといわれる。明鎮澄の『清涼山志』⁽¹⁷⁾の記載によれば、

後漢の明帝（57～75年）の時、摩騰がインドにいて、智慧の目で五台山（清涼山）を観察し、五台山が文殊菩薩の教化する道場であることがわかった。五台山にはアソカ（ACoka 阿育王、前268－232頃在位）が建てた仏舎利塔があったので、明帝はそれから始めて仏の教えを信じるようになったと伝えられる。そういう理由から山名を「五台山文殊菩薩の道場」という。

とある。上記の仏舎利塔とは、現在の塔院寺のことを指している。

塔院寺は、五台山の五大禪林の一つである。なお他の四つは顯通寺、羅候寺、殊像寺、菩薩頂である。塔院寺は、最初は顯通寺に所属する塔院であった。明永樂五年（1407年）に、仏の舎利塔を再び修理する時、独立して寺院になった。現存している釈尊の舎利塔は、明万曆年間（1573～1619）に建てられたものである。高さは75.3メートル、環の周囲は83.3メートルある⁽¹⁸⁾。

おわりに

以上、主にパクパと五台山との関係を中心に述べてきた。パクパの生涯の経歴と活躍の跡をたどり総括すると、彼はチベット、モンゴル、中国の歴史上の展開に、さまざまな面で重大な影響を及ぼしたことがわかる。宗教面では、パクパはチベット仏教の高僧で一派の教主でありながら、元朝の皇帝から尊敬され、全国の仏教を総括する立場にあった。チベット仏教の他の教派の高僧と比べると、パクパは、類をみない傑出した宗教上の活動家でもあっ

た。彼は仏教について深く広い知識と智慧や慈悲心、菩提心に恵まれていただけでなく、謙讓の美德も兼ね備え、徳行に秀でた人物であった。優れた対機説法で、モンゴル帝国の元朝世祖フビライ・ハンをはじめ、朝野のすべてから全幅の信頼を受け、敬重され、仏教をモンゴル帝国、すなわち以後の元朝に広宣した。

政治面でも、パクパは傑出した社会活動家であった。彼は、歴史の潮流の中において、生涯かけて自己の精神と体力とのすべてを奉仕し、チベットとチベット族が居住する地域がモンゴル帝国の元朝に帰順した政治情勢下において、モンゴルとチベット、あるいは中国の漢民族と宗教文化の交流に大いに尽力した。彼は、世祖フビライ・ハンが開創した皇室を後ろ盾として、チベット仏教を総領し、チベットにおける地域政治を主管した。いわゆる「政教合一」という当時の制度は、モンゴル民族の元朝から漢民族の明朝を経て満洲族の清朝、中華人民共和国建国に至るまで、およそ800年間続いた。

彼はモンゴル帝国による中国全土統一を支持し、分裂に反対した。そして自分の教派や家族とモンゴル帝国とは、運命共同体であるとしたのである。こうした考えの下に、チベットでは、軍政機関、行政体制、驛所（連絡所）を創設し、戸籍を精察し、法律を施行した。このことが、チベットの地域とモンゴル帝国の元朝（中国内地含む）の間の政治、経済、文化などの交流に大いに貢献したものと考えられる。

歴史上、チベットが中国の「不可分割」の一部となったことは、パクパがモンゴル帝国元朝の帝師になったことと切り離して考えることはできない。彼はチベット民族、モンゴル民族、漢民族の民族融和に、多大な功績を上げただけでなく、チベット自体の歴史発展にも大いに貢献した。チベットの吐蕃王朝以来、過去数百年にわたって分裂していた各地方を統一した。そして、チベットの歴史上初めて、チベット各地僧俗の首領と親しい関係をつくり上げ、僧俗の別なく各地の領袖（代表者）の間を遍歴することができるようにした。同時に彼は多くの親族や弟子をモンゴル帝国元朝に推挙し、モンゴル帝国元朝の役人としていた。パクパは正に、チベット人とモンゴル人あるいは漢民族乃至世界の人々すべてが等しく認める偉大なる指導者であった。

文化面でも、パクパの貢献は大いなるものがあつた。たとえばモンゴル帝国元朝にモンゴル語の新しい文字「蒙古新字」（八思巴文字）を創製し、文化遺産の保存に大きな貢献をしたことが挙げられる。またチベット仏教、医学、芸術、建築などを元朝に伝え、中でも、北京にある白塔寺は、代表的なものである。また一方で、漢民族の文化をチベット地域に紹介するなどした。彼の努力によって、モンゴル民族、チベット民族、漢民族の間の民族文化と宗教文化の交流が、一層促進されたことは言うまでもない。

パクパは、チベット仏教の発展史における偉大な人物であるにとどまらず、ソンサンガムポ（Srong btsan sgan po 629-650）以後のチベット政治上の第一人者であり、世界史の上においても、傑出した人物の一人に数えられるであろう⁽¹⁹⁾。

【注】

- (1) 嘉木揚凱朝：「论萨迦班智达对于蒙藏佛教交流的贡献（サキヤ・パンデイタによるモンゴル仏教とチベット仏教交流への貢献）」（『世界宗教研究』2020年第6期・65頁～72頁）
- (2) 中国仏教協会編『中国仏教寺院』（中国世界語出版社、1995年）39～40頁には以下のようにある。
 五台山の山域は、東西の長さ約90キロメートル、南北の広さ約60キロメートルに及ぶ。いわゆる五台とは、東・西・南・北・中の五峰をいい、中台の翠若峰は、海拔2,894メートルあり、東台の望海峰は、海拔2,795メートルあり、南台の錦綉峰は、海拔2,485メートルあり、西台の挂月峰は、海拔2,773メートルあり、北台の葉闡峰は、海拔3,058メートルである。これらの呼び方は、山の形と風景によるものである。
 五世紀以来、時代ごとに寺院が建てられ、遠くは日本、インド、ネパール、インドネシアなどにまでも、その名の聞えた仏教の総本山である。唐代の盛時には、全山に360の寺院があり、僧尼の数は一万を数えたといわれる。明末清初には120の寺院を数え、現存する寺院は大小合せて200カ所あるが、活動している寺院は47カ所である。全世界の各地の仏教徒が、遠隔の地であるにもかかわらず遙々参拝にやってくる。盛夏でも平均気温が摂氏20度前後と涼しいため、清涼山の別名がある。
- (3) 『元史』202卷「釈老伝」。野上俊静『元史釈老伝の研究』（朋友書店、1978年）9～11頁参照。
- (4) 王雲五主編『元史記事本末・明史記事本末』（台湾商務印館、1967年、国学基本叢書四百種）111頁。
- (5) 陳慶英『元朝帝師八思巴』（中国蔵学出版社、1992年）74頁。
- (6) 『薩迦五祖全集』（第十五函）第111叶。
- (7) 『元朝帝師八思巴』75頁。
- (8) 『元朝帝師八思巴』76～77頁。
- (9) 積鎮澄『清涼山志』（中国書店出版社、1989年）12頁参照。元好問は山西忻県出身であり、モンゴル帝国憲宗モンケ・ハーン（Mongke Han 蒙根汗1252-1259在位）の時、1254年に五台山を巡礼したことがあると記している。
- (10) 『元朝帝師八思巴』78頁。
- (11) 『薩迦五祖全集』（第十五函）第113～119叶。
- (12) 『元朝帝師八思巴』79頁。
- (13) 段啓明・戴晨京・何虎生『中国仏寺道観』（中国中共中央党校出版社、1993年）92～96頁。
- (14) 『中国仏寺道観』100～103頁。
- (15) 『中国仏寺道観』114～116頁。なお、中国仏教協会編『中国仏教寺院』41頁によれば、文殊殿の中に200の文殊菩薩の銅像が祀られている。
- (16) 『中国仏寺道観』119～121頁によれば、観音洞はまた棲賢寺ともいう。清朝の康熙年間（1662～1722）に、ダライ・ラマ十三世トッブタンギャンツォ（Thub bstan rgya mtsho 土登嘉措 1876-1933 仏教海の意味）が1908年、五台山に赴き、観音洞で瞑想した。チベットとモンゴルの僧俗は、五台山に参拝する時には、必ずダライ・ラマが瞑想した所で礼拝する。筆者も1989年にチベット仏教大学の参拝団の一員として、五台山の観音洞でダライ・ラマが瞑想した所に礼拝したことがある。鎮海寺・台麓寺・慈福寺・善財洞などがある。五台山では、中国系の寺院を青廟と呼ぶ。それに対して、チベット系とモンゴル系の寺院を黄廟と呼んで区別されている。
- (17) 積鎮澄『清涼山志』（中国書店出版社、1989年）2頁参照。
- (18) 『中国仏教寺院』39～40頁。
- (19) 嘉木揚凱朝『モンゴル仏教の研究』（法蔵館、2004年）105-143頁。